

『恋知らずの將軍は押しかけ騎士様に溺愛される』

著：名倉和希

ill：蓮川 愛

フランシスは、將軍専用の執務机の前に立つ男を、じっと見上げた。

身長は双子の護衛とおなじくらいだろうか。横幅はちょっと狭い。だが一般の兵士よりもずっと筋骨隆々としていて、手足は長かった。茶褐色の髪は清潔感のある短さに整えられていて、瞳は榛色。下位貴族が身につけるような平服姿ではあるが、腰には剣を――佩《は》いている。標準より幅広でわずかに長いように見えた。腕に覚えがない者が持つ剣ではないとわかる。

榛色の瞳はフランシスをまっすぐ凝視していた。王国軍將軍の目を、なぜそれほど自信たっぷりに見つめることができるのか。

侮られているのか、と疑ったが、フランシスはなにも言わずに手元の身上書に視線を落とし、そこには地方都市の下位貴族家出身、ウィル・フォード、二十八歳と書かれている。成人してから十年間、国内各地を旅して剣の腕を磨いてきたという。推薦者にはボールズ侯爵の名があった。

「騎士希望、か」

「はい。ぜひ王国軍騎士として採用していただきたい」

はきはきとしゃべるウィルという男を、フランシスはもう一度見上げた。目が合うと、ウィルは嬉しそうに微笑んだ。緊張感がない。なにがそんなに嬉しいのか。

フランシスは両脇に立つブランドンとクリフトンを、交互に見た。二人とも白けた空気を隠しもしない。

「ウィル・フォードとやら。軍属の経験もないのに、いきなり騎士として採用してもらいたいなどと、ずいぶん高望みをするのだな」

「そうでしょうか。俺の腕が信じられないなら、いますぐその双子のどちらかと模擬試合をしてもいいですよ」

挑戦的な目を向けられた双子は、一気に――剣《けん》――呑《のん》な雰囲気になった。フランシスはため息をつき、右手をひらりと上げる。双子の気配が沈静化した。

「二十八歳ならば、ボールズ侯爵の嫡男ゴードン殿と同年だな」

「そうですね」

「この双子、エルス兄弟とも同年ではないか？」

「そうかもしれません」

ウィルはしれっと返し、なにも問題はないと言いたげな様子だ。

「俺の希望としては、將軍の専属護衛騎士の一人になりたいのですが」

「は？」

思わず変な声が出てしまい、フランシスは右手で自分の口を覆った。またもや双子の気配が | 尖《とが》ってくる。いちいち制止するのも面倒になってきた。

「私の専属護衛はこの二人でじゅうぶんだ。ほかにも護衛騎士は何人もいる」

「いやでも、俺がたぶん一番腕が立つと思います。それに将軍を守りたいという気持ちはだれよりも強いと自負しております！」

圧が強い。なぜそこまで情熱的になっているのか、フランシスは皆目見当がつかなかった。

「まずは仮の採用で結構です。お試し期間を設けて、そのあいだ俺を使ってください」

困惑しかないが、この男が王国軍と自分に対してなにか悪い | 魂《こん》 | 胆《たん》を胸にこんなところまで来ているわけではないことはわかる。

「……では、おまえの剣の腕を見せてもらおうか。採用するかどうかはそれからの話だ」

「よろこんで」

自信満々のウィル・フォードにいささか | 呆《あき》れつつ、双子の片割れ、クリフトンに命じる。

「おまえが相手をしろ」

「はっ」

「真剣は不可だ。模擬刀を使え。先に練兵場へ行って準備をしろ」

クリフトンがもう一度「はっ」と返事をして、ウィル・フォードとともに執務室を出ていく。フランシスはブランドンに書類を片付けさせた。

「あの男、なにを考えているのでしょうか」

ブランドンがぼそりと呟く。

「わからん……。わからんが、悪事を働くために来たわけではないだろう。ふざけている可能性はある」

フランシスは嘘ばかりが並べられた身上書を引き出しに放りこんだ。

「ウィル・フォードとはずいぶんと安易な偽名だ。あれはウィルフレッド・ベックフォードにちがいない」

近衛騎士団長マックスウェル・ベックフォードの嫡男、ウィルフレッドだ。推薦人のボールズ侯爵の嫡男ゴードンは、ウィルフレッドが近衛騎士団長に就任したら副団長になる予定で第一分隊長を退任したと聞いた。ウィルフレッドとゴードンは幼いころから親しい間柄らしい。

「ボールズ侯爵も面倒なことに巻きこまれたものだな」

息子の出世のために名前を貸したか。

「ベックフォード公爵がこのようなことに許可を出したのが信じられない」

「せっかく戻ってきたのに、また出奔されては困ると考えて言いなりになったのかもしれませんが」

どの家も父子という | 繋《つな》がりで翻弄されている感じがする。それが貴族というものか。

「ウィルフレッド殿に最後に会ったのは十年前ですが、とくに|容《よう》|貌《ぼう》は変わっていません。われわれに顔を覚えられていないと高を|括《くく》っているのでしょうか」
ブランドンの呟きに、うむ、とフランシスは頷く。

「私もウィルフレッド殿には十年前に会っている。向こうはたぶん私を覚えていないだろう」
「閣下を覚えていないことなど、あり得るのですか？」
「あり得るさ。そのころの私は十歳だぞ」

あれは王族主催の舞踏会だった。父親に連れられてはじめて足を踏み入れた大人の社交場に、フランシスは|気《き》|後《おく》れして柱の陰に引っこんでいた。

派手に着飾った紳士淑女の中に、|漆《しっ》|黒《こく》の騎士服を着た若者がいるのを見つけた。闇色の服が、逆に目立っていた。夫人たちのおしゃべりや甘い香水の|匂《にお》いにうんざりとした顔をして、美しい令嬢からダンスに誘われても応じない。何度も断っていたが、とうとう一人の女性の手を取って踊りだした。素晴らしい足さばきとリードで、彼は踊った。けれど|憂《ゆう》|鬱《うつ》そうな顔はそのまま。

『ウィルフレッド様、やっぱりお姉様としか踊らないのね』

『ひさしぶりにお顔を見られたのに、話してもらえなかったわ』

近くで女性たちがこそこそと話をしていたので、若者がウィルフレッドという名だと知り、ダンスの相手が彼の姉だとわかった。そして彼が社交場を嫌っていることも察した。

『ウィルフレッド様は、やっぱり近衛騎士団に入られるのかしら』

『それはそうでしょう。ベックフォード公爵家の嫡男よ。次の近衛騎士団長だわ』

おしゃべりな女性たちのおかげで、フランシスは彼の素性まで知ることができた。|憂《うれ》いたっぷりの表情ながらも、姉を上手にリードして踊っているウィルフレッド。フランシスはなぜか目が離せなくて、彼が踊り終わるまでずっと見つめていた。

そして後日、ウィルフレッドが出奔したと聞いた。剣の道を極めるために、国内の鍛錬場を渡り歩くという。フランシスの父親ラトヴィッジは、ベックフォード公爵のことを気にかけていた。

『跡継ぎが出奔したなどと前代未聞だ。公爵の心痛を思うと私まで気分が落ちてくる。フランシス、おまえは出奔することなど考えてくれるなよ』

はい、と頷きながら、フランシスは自分を貫いて旅立ったウィルフレッドを格好いいと思った。舞踏会ではにこりとしなかったが、いまごろ自由の空の下で開放的な笑顔になっているのかもしれない。

（いつか帰ってくるのだろうか。そうしたら、ウィルフレッド殿は近衛騎士団長、僕は王国軍將軍として、二人で力を合わせてこの国を守っていける）

そんなふうな夢を描いたものだ。

まさか十年後、こんなかたちで再会することになるとは。

ウィルフレッドがなぜ王国軍將軍の護衛騎士を志願してきたのかわからないが、ゆくゆくは近衛騎士団長に就任することは決定している。この国の重職は世襲だからだ。

(どうしてこう面倒事がつぎつぎと起こるのだ)

将軍としての執務だけに集中したいのに。

(ユージニアのためにも、ウィルフレッド殿とは友好関係を築いておいた方がいいか……)

フランシスは妹の今後をつい考えてしまう。王太子妃になれば、彼女を護衛するのは近衛騎士団だ。ユージニアの命運をウィルフレッドが握ることになるのかもしれない。「軽い気持ちで体験入隊するつもりだとしたら、王国軍を | 舐《な》めないでもらいたい」と腹を立てている場合ではない。

フランシスは深呼吸をして、波立ちそうになる気持ちを抑えた。心が | 凪《な》いでから、ゆっくりと立ち上がる。

「行こうか」

フランシスはブランドンを連れて練兵場へ向かった。そこにはすでに人集りができていた。

王国軍随一の剣士であるクリフトンと、見慣れない顔の男が模擬刀を手に向かいあっているのだ。兵士たちにとってこのうえなく好奇心がくすぐられる場面だろう。

フランシスが現れると、兵士たちは道を開けてくれた。クリフトンとウィルフレッドがよく見える位置に立ち、「はじめろ」と命じた。

二人は模擬刀を構えて静止した。模擬刀は刃が | 潰《つぶ》してあるが、真剣とおなじ重さがある。フランシスにとっては重いが、いま | 対《たい》 | 峙《じ》している二人は軽々と扱っていた。おたがいの呼吸を感じながら一瞬たりとも視線を | 逸《そ》らさない。双方とも素晴らしい集中力だ。それだけで、フランシスはウィルフレッドがかなりの腕だとわかった。

先に仕掛けたのはクリフトンだった。気迫のこもった一撃を、ウィルフレッドは素早く避ける。標準よりずっと立派な体格をしているのに、まったく重さを感じさせない | 俊《しゅん》 | 敏《びん》さだ。クリフトンは連続して剣を振るったが、ウィルフレッドはすべてを避けるか剣で受け流し、間合いを詰めさせない。

「逃げるだけがおまえの技か！」

クリフトンが挑発的な言葉をかけたが、ウィルフレッドは口元に不敵な笑みを浮かべただけで冷静さを失っていないようだ。もっと多彩な剣戟を見せてもらいたい、とフランシスが思ったときだった。ウィルフレッドが斬りかかる。

ガツン、と重い金属音がして剣と剣がぶつかり、クリフトンが大きく一步下がった。まともに剣から腕に衝撃が伝わったらしく、クリフトンは剣の柄を何度か握り直す。 | 痺《しび》れを感じているのかもしれない。その隙に、ウィルフレッドが一気に間合いを詰めた。

ガン、ガンと剣が発する音とは思えない重低音が続けて練兵場に響いた。それほどウィルフレッドの一撃が重いのだろう。

クリフトンがじりじりと後退し、人集りに背中が迫りそうになったところで、フランシスは「そこまで」と制止した。なぜ止めたのか、と不満もあらわな顔でクリフトンが | 睨《にら》んできたが、フランシスは無視した。

「ウィル・フォード、おまえの力量はわかった。じゅうぶん、騎士として採用する段階にあるよ

うだ。それに、推薦人のボールズ侯爵とは親しくさせてもらっている。あの方が認めた男ならば、私は信用して、受け入れよう」

「ありがとうございます」

ウィルフレッドは汗ひとつかいていない。礼儀正しく、彼はフランシスに頭を下げた。

集まっていた兵士たちが、「騎士として採用だと?」「どこのどいつだ?」「ボールズ侯爵の推薦?」とざわついている。

「この者はウィル・フォードという地方の下位貴族だ。私に仕えたいと王都に出てきた。今日から私の護衛騎士として務めることになる」

フランシスが声を張って知らせると、兵士たちはみんな驚愕しつつも新参者を迎え入れようという空気になった。クリフトンと互角に戦っていたからだ。わざわざ模擬試合を練兵場で行ったのは、兵士たちにウィルフレッドの顔を覚えさせ、剣の腕を見せつける意味もあった。

「誠心誠意、將軍閣下に仕えさせていただきます!」

騎士の敬礼をするウィルフレッドは表情を引き締めたが、どうにも空気が緩い感じがする。

「総務部へ行き、文官から護衛騎士の服を支給してもらえ」

「はっ」

ウィルフレッドはきびきびとした足取りで練兵場を出ていった。

「よろしいのですか」

横からブランドンが小声で聞いてきた。

「とりあえず、ウィルフレッド殿の真意がわかるまでは様子を見る。そのあいだ、ウィル・フォードとして扱おう。いいな?」

「わかりました。下位貴族としてぞんざいに扱ってもいいということですね」

好戦的にニヤリと笑ってみせるブランドンに、フランシスは「ほどほどにな」と苦笑いした。

クリフトンは不完全燃焼といった表情でフランシスに近づいてくると、「申し訳ありません」と頭を下げた。

「あいつを打ち倒そうという気持ちが前面に出すぎたようです。偽りの身上書にイライラしてしまいました」

やはりクリフトンも彼がウィルフレッドだとわかっていたようだ。当然だろう。

「未熟者め」

双子の兄に「詰《なじ》られて、弟は「なんだと?」と「気《け》」色《しき》ばむ。フランシスは「戻るぞ」と一声かけて執務室へ引き返した。双子は慌ててついてくる。

「お待たせしました!」

半刻ほどすると、ウィルフレッドは着替えて執務室に戻ってきた。焦げ茶色の騎士服を着ている。

双子は深緑色の騎士服を着ているが、それは二人だけの特別色だった。ウィルフレッドは文官に体格に合うものをちゃんと出してもらったようで、焦げ茶色の騎士服をしっかりと着こなしている。腰に佩いた剣は自前のもののままだ。支給品を断ったらしい。

姿勢がいいからだろう、やはり騎士服がよく似合っている。だがどこか不満そうに、ウィルフレッドは双子の騎士服にじっとりとしたまなざしを注いでいた。

「俺も深緑色のものを着たいのですが」

「新参者が生意気を言うな」

ぴしりとクリフトンに「叱《しか》」られ、ウィルフレッドは口を閉じた。

その後は、執務をするフランスの横で双子から將軍の警備態勢についておとなしく説明を受け、いくつか質疑応答をしていた。それをフランスは自分の書類仕事をしつつも、なんとなく聞いてしまう。ウィルフレッドはどうやら真面目に將軍の護衛騎士を務めるつもりのようなのだ。質問は的確で、ふざけた雰囲気はまったくない。

「おまえ、騎士の宿舎で寝泊まりするのか？」

ブランドンの質問に、ウィルフレッドは「いや」と首を横に振った。

「ボールズ侯爵邸に間借りさせてもらうことになっている。勤務時刻に合わせて出仕する」

「通いか。しかも侯爵邸だと？」

「普通、新人で独身の騎士は宿舎に入るものだぞ」

独身の新人騎士用宿舎は、食堂で好きなだけ食事ができることは利点だが、部屋はかなり簡素だと聞いた。高位貴族として生まれ育った者は、たいてい宿舎の環境に慣れるまで時間がかかるそうだ。ウィルフレッドはその点、十年の旅の経験があるので馴染むのは早いだろうに、侯爵邸に「居候《いそうろう》」とは。新人騎士としてはずいぶん恵まれた環境で生活するわけだ。

双子は「胡《う》」「乱《ろん》」な目になったが、ウィルフレッドは、「でも新人すべてが、宿舎入りが絶対条件ではないよな？」と動じない。身上書のとおり本当の地方の下位貴族出身者ならばエルス兄弟は雲の上の存在だろうに、ウィルフレッドの態度はどうていそうは見えなかった。演技力がないのか、それとも演技する気がないのか。

「では、ウィル・フォード、試しに護衛につけ。將軍閣下、そろそろ会議の時刻です」

ブランドンに促されてフランスは立ち上がった。執務室を出ると、いつものように双子がフランスの前後を歩く。右斜め後ろにウィルフレッドがついた。驚いたのは、まるでいままでずっとそうだったかのように、ウィルフレッドが双子と足並みを揃えて歩いたことだ。呼吸までぴったりと合っているように感じる。

廊下をすれ違う文官や士官たちが、フランス一行に道を譲りながら、見ない顔のウィルフレッドを好奇の目でちらちらと眺めてきた。護衛騎士が増員されたことは、明日の朝礼で告知されるはずだ。ウィルフレッドは王国軍内で一躍時の人となるだろうが、きっと「歯《し》」「牙《が》」にもかけないにちがいない。「杜《ず》」「撰《さん》」な身上書を堂々と提出したくらいだ、それくらい図太い神経をしていそうだった。

違和感なく廊下を進み、会議室へ到着した。そこにはすでに数人の師団長と旅団長たち、ドゥーガルドの姿があった。文官と話をしていたらしいドゥーガルドは、フランスたちを振り返る。

「將軍閣下、その者ですか、あたらしく採用した護衛騎士というのは。もうずいぶんと、王国軍

内で噂になっているようですよ」

にこやかに話しかけてきたドゥーガルドの後ろで、文官がそそくさと会議室を出ていった。オールマンの子飼いなのだろう、ウィルフレッドのことを伝えに来たわけだ。

「そうだ、ウィル・フォードという。推薦人が信用できる人物だったので、まずは仮の採用をした。しばらく様子を見る」

クリフトンが引いてくれた椅子に座ると、フランシスは右横に立ったウィルフレッドを紹介した。ドゥーガルドはウィルフレッドをじろじろと品定めするような目つきで眺め、かすかに鼻で笑った。

「護衛騎士ばかり増やして、将軍閣下はずいぶんと身を守る意識がお高いようすな」

あきらかに馬鹿にした言い方だったが、フランシスはこれしきのことで頭に血を上らせたりしない。ちらりとウィルフレッドを見遣れば、彼も澄ました顔を崩していなかった。

ウィルフレッドよりも双子の方が怒っている空気を発していた。これはひとことでも言い返さないと、双子のどちらかが——いやクリフトンの方が短気か——暴言を吐きそうだ。

「私は自分の体格が人並み以下なのを自覚している」

フランシスは「鷹《おう》」「揚《よう》」に話しだした。

「いくら剣の腕を磨いても、騎士たちほどには強くなれない。無駄なあがきはやめて、頑健な剣士に頼って身を守ってもらおうと決めているのだ。もちろん心身の鍛錬は欠かさないことにしているが」

「そうですな。実際、毎日のように兵士たちが見守る中で双子の片方と剣技の鍛錬に励まれているとか。いやはや、私には真似できませんな。将軍閣下の若さが「羨《うらや》ましいほどです」

おまえは日々の鍛錬などしていないだろうが、と当てこすったつもりだったが、ドゥーガルドはフランシスの若さを羨む言葉を吐きながら見下してくる。

フランシスはこっそりとため息をついた。

この男がユージニアの義父にならなくて本当によかった——と思ってしまう。まだ父親が生きていて、王太子からの明確な求婚がなかったころ、ドゥーガルドからアルジーとユージニアの結婚話を持ちこまれたことがあった。

そのときユージニアはまだ十二歳で、アルジーは二十六歳。政略結婚ならば珍しくない年齢差ではあるが、公爵家の令嬢がわざわざ格下の伯爵家に嫁ぐ理由がなく、父親はきっぱりと断った。フランシスは単純に、まだ幼いユージニアが嫁ぐ話なんてと衝撃を受け、断ってくれた父親に感謝しただけだったが、のちにアルジーのよくない評判を耳にして愛する妹の結婚はぜったいに自分が認めた者としかさせないとは決意したのだ。

つぎつぎと役職付きの者が会議室に入ってきて、時刻となった。新参者のウィルフレッドに退室を促すと、彼は従順に出ていく。

「では、定例会議をはじめます。まずトゥーロス王国との国境について報告を」

フランシスが口を開くと、ルーカン砦からの報告を文官が読み上げはじめた。

その後、会議は滞りなく終わり、フランシスはクリフトンとウィルフレッドを連れて練兵場へ向かった。いつものように、まずクリフトンと真剣で打ちあいをする。自然と集まってきて見学している兵士たちを、ウィルフレッドは厳しい目つきで警戒していた。

一汗かいたあと、今度は射的場に足を向けた。フランシス専用の弓が保管してあるので出してもらう。小柄な体格に合わせて作らせた弓だ。ほかの兵士たちと並んで、続けて十本ほど矢を射る。二十メートルほど先に置かれた、| 麦《むぎ》 | 藁《わら》で作られた的にすべて命中した。

「おお、さすがだ」

周りの兵士たちが感心した声を上げるが、フランシスはもっと精度を上げたいと思っている。

麦藁の的にもう少し遠くへ動かしてほしいと命じようとしたときだった。斜め後ろに立っていたウィルフレッドがいきなり動いた。

カン、と乾いた音が聞こえたときには、地面に折れた矢が落ちていた。ウィルフレッドは腰の剣を抜いている。彼はフランシスの隣で弓を使っていた兵士に怒鳴った。

「将軍を狙って射たのか？」

真っ青になったその兵士は、慌てて地面に両膝をつき、手にしていた弓を放り投げる。両腕で頭を抱えるようにして「申し訳ありません！」と悲鳴のような声を上げた。

「わざとではありません！ 手が滑って、矢が、将軍に……。決して、将軍を害そうとしたわけではありません！」

顔を上げた兵士の顔は、流した涙に土がついて汚れていた。フランシスはやっとなにが起こったのか理解した。自分へ向けて飛んだ矢を、ウィルフレッドが| 叩《たた》き落としてくれたのだ。この至近距離で、よくぞ瞬時に動けたものだ。クリフトンも唖然としている。

「どうなさいますか」

ウィルフレッドがフランシスに尋ねてくる。兵士の言い訳を信じたいところだが、ここでその判断はできない。クリフトンに兵士の取り調べを命じた。

フランシスは集まっていたほかの兵士たちを見渡し、「安易な| 憶《おく》 | 測《そく》でこの出来事を広めないように」と釘を刺し、今日の鍛錬を終了することにした。

執務室に戻り、射的場での一件をブランドンにも共有させる。その後、やっとな日の執務が終了した。フランシスはいつものように馬車に乗り、騎乗した双子に併走されて帰路につく。王国軍司令部を出るとき、ウィルフレッドとほかの護衛騎士たちに見送られた。

しばらく走ってから、フランシスは馬車の窓を開けた。

「ウィルフレッド殿の働きぶりを、どう思った？」

ブランドンに問いかける。彼はまっすぐ前を向いたまま、「有能ですね」と端的に答えた。

「クリフトンは？」

反対側を駆けている双子の片割れにも聞く。

「はなはだ面白くないですが、使えます。射的場での件には驚かされました。それに、初日からわれわれの動きを妨げない勘のよさを見せつけられると、護衛騎士として合格点を出さざるを得

ないです。ただ単に剣の腕が立つだけではありませんでしたね」

とても悔しそうに言うものだから、フランシスはつい笑ってしまった。

「そうか。私も同意見だ。使えるのならそれにこしたことはない。しばらく様子を見よう」

彼がいったいなんの目的を持ってきたのかわかるまで。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>